

# 代名詞 “ON” に関する一試論

土 井 隆 広

## はじめに

この小論は伝統文法で不定代名詞の範疇に分類される言語記号 on の機能について分析・考察するものである。

on に関する研究には ATLANT, F. (1984), CLAS, A. (1968), NISHIMURA, J. (1984, 1987) 等の優れた論考がいくつかあるものの, on の性格はまだ完全に解明されたとは言い難い。この三研究を含めて, 従来の研究はすべて on の不定性や人称性, そうでなければその捉え難さそのものに固執しており, そのため on の性格の本質的なある部分が見落とされてきたように思われる。

この小論では, 新しい観点から考察・分析を行い, 新しい仮説を導き出した。つまり, 従来の研究の視点から離れて, 専ら情報伝達の観点から見た on, 談話の中における on, 話者の観点から見た on を問題とするのである。

on の談話上の基本的な機能を論じた (1, 2 章) 後, on を主語とした文の談話の中における働きを考察し (3 章), 最後に on を使用する話者の態度を見る (4 章)。

## 1 ON の基本的な機能

この章では話者が on をあらゆる場合において旧情報<sup>(1)</sup>の担い手として使用していることを論じる。これは今まで言及されることのなかった on の談話上の基本的な機能である。

01 *On a souvent besoin d'un plus petit que soi.*<sup>(2)</sup>

02 *On frappe à la porte.*

03 *On donne L'Avare à la Comédie-Française.*

01は伝統文法において *on* が「人一般」を表すとされる用法であるが、話者が *un homme* 等の明示的な表現ではなく *on* を用いている点に注意すべきである。この発話では主語に *on* を立てるだけで「人一般」を容易に喚起できるのである。話者は *on* によって新しい情報を発話に持ち込んでいるのではない。

02は「ドアがノックされている」という状況があって初めて成立する発話である。文脈<sup>(3)</sup>が「不定の人」という情報をもたらすのであり、*on* によって新しい情報が発話の場面に持ち込まれるわけではない。

03についても同様である。伝統文法流に言えば、「不定の人々」を伝えるものとして話者は *on* を使用しているのであるが、その人々とは *on* と述部の組み合わせから、常識的な判断ですぐに意識に上らせることの可能な情報、すなわち旧情報である。

*on* が「人称代名詞の代理」を行うとされる用法については例を挙げるまでもない。人称代名詞は、一般に、旧情報を伝える指示表現、つまり文脈あるいは発話の場面で特定の事物に言及していることが明瞭な表現であるからである<sup>(4)</sup>。

次に問題になるのは *on* による情報の引き継ぎの方式であるが、それが人称代名詞、指示代名詞のような指示・照応方式でないことは明らかである。人称代名詞、指示代名詞は指示機能と性・数の照応機能を組み合わせて情報の引き継ぎを行うが、*on* にはそれら一切が欠けている。NISHIMURA (1984) に詳しくあるように、「*on* は人の表示を行うだけの言語記号で、特定の現実に顕在化するための表示を一切持たない言語記号なのである」<sup>(5)</sup>。それでは、*on* による情報の引き継ぎはいかにして行われるのか。これには二つの要素が関与していると考えられる。一つは *on* が持つ意味特徴「人」、もう一つは *on* を取り巻く

文脈である。

04 — Ah, non! Jeannette, c'est moi qui paie.

— Non, aujourd'hui, c'est moi qui t'invite.

— Ah, ce n'est pas à toi de payer.

— En ce cas, *on* partage.

日常会話の一例である。話者は旧情報 *nous* を引き継ぐのに *on* を使用しているが、この使用を支えているのは *on* と *nous* に共通する意味特徴「人」と文脈の二つである。これらの他にこの *on* の使用を可能とする要素は何もない。話者は、会話の文脈を利用して、指示機能も照応機能もないただ「人」を表すだけの言語記号 *on* で旧情報を伝えているのである。

以上の考察から、話者は *on* によって旧情報が持つ多くの意味特徴の内の「人」という特徴のみを取り上げ、文脈を利用しながらその情報を後続の文脈に引き継ぐのだと考えることができるであろう。

## 2 ON による情報の削減

*on* は常に旧情報を伝えるが、*on* による情報の引き継ぎの様相は一樣ではなく文脈により異なる。この章ではこの様相を見、そして人称代名詞、指示代名詞のそれとの決定的な違いを見る。

### a 旧情報が明確な場合

05 (隊長が部下に向かって言う)

— Viens, Janin. *On* va voir.

(NHK)

06 (騎馬が猛烈なスピードで話者のそばを通り過ぎる)

— Qu'est-ce que c'est que ça! *On* veut me tuer?

(NHK)

07 (女の叫び声を母親と一緒に聞いた少年が、翌日唐突に母親に言う)

— Alors, maintenant, tu le sais, dit l'enfant, pourquoi *on* a crié.

(DURAS, p. 20)

話者は、明確で不定なところが全くない情報を on で代用させ、旧情報が持つ情報量の大幅な削減を行っている。発話の場にいる二人の人物が、馬を疾駆させて話者のそばを通り過ぎる男が、昨日叫び声を上げた女が、様々な情報を切り捨てられて単なる「人」になる。

b 旧情報が不明確な場合

08 (女が男に自分の住んでいる家の場所を説明する)

— J'habite la dernière maison du boulevard de la Mer, la dernière quand on quitte la ville. Juste avant les dunes. (DURAS, p. 30)

09 — Tu ne connais pas un bon restaurant par ici?

— Si, je connais un petit restaurant. On y sert une bonne choucroute.

旧情報は a の場合ほど明確ではない。つまり、旧情報が持つ情報の量は a に比べて格段に小さい。話者の on による情報量の削減については、a の場合に比べれば小さいとは言え、やはり大幅に行われている。輪郭は定かではないが漠然とは規定できそうな人達が一樣に単なる「人」にまでその情報を切り詰められてしまう。

c 旧情報が「人一般」の場合

10 On est égaux devant Dieux.

11 Quand on se plaint de tout, il ne vous arrive rien de bon.

ここでは情報量の削減がほとんどない。個人あるいは複数の人間の諸特徴を切り捨てて残った単なる「人」は「人一般」に他ならないからである。

a, b, c と話者の on による情報量の削減の度合いを見てきたが、ここで注意すべきは、この削減が人称代名詞や指示代名詞によるそれとは本質的に異なっていることである。当然、人称代名詞や指示代名詞によっても情報量の削減が行われて旧情報が伝えられる。しかし、これらの代名詞は指示機能や性・数の照応機能を有しており、その機能のおかげで特定の人物・事物に言及していることが明瞭であって、情報の引き継ぎは表面的には情報量削減の形で行わ

れているかに見えても、潜在的には復元可能な形で行われているのである。

12 — J'ai lu un roman de Proust. *Il* était très intéressant.

ブルーストの小説 → 先行文脈で述べられた男性名詞

*il* という人称代名詞が持つ指示と照応の機能が言及されている事物を言語的に明示するため、情報量は削減されているものの、その削減をほとんど意識させない。

これに比べて *on* には指示の機能も性・数の表示もない。情報は復元の言語上の抛り所をほとんど示されないままに削減される。

13 A : Eh, Yvonne. Cache-toi. Les soldats passent.

B : Pas de danger pour moi. Je ne suis plus jeune.

C : Au secours! *On* enlève Madeleine.

(NHK)

村を襲う兵隊達 → 人

### 3 ON を主語とした文の働き

この章では、*on* を主語とした文が談話の中にあっていかなる働きを成すのかを具体的に分析・考察してゆき、一つの仮説を提出する。

14 — La musique est très jolie. J'aime bien ce film. Je le reverrai volontiers.

— Alors, *on* y va!

二人で映画に行く話をしている。第2の話者にとって自分達二人が映画に行くのは当たり前のことで、問題は第1の話者が提案した映画に行くか否かということだけである。この状況において、その映画に行くことを効果的に告げるにはどうすればよいか。「その映画に行く」という情報だけを伝達できれば最も効率がよいであろう。主語に関する情報を低め、述部の情報を効率的に伝達するために *on y va!* が登場する、と考えられないだろうか。

15 — Alors, *nous* y allons!

14を上のように書き変えると主語が前面に出、明らかに談話における情報の流れが悪くなってしまう<sup>(6)</sup>。

16 — ... Demain, j'irai à Crespin voir Florette.

— Mais jamais de la vie! Mais si tu vas demander, tu fais voir que tu en as envie, et alors *on* te dit des prix trois fois trop chers. Et puis Florette, si elle sait que c'est pour nous, elle dira non. (PAGNOL, pp. 23-24)

土地の問題で悩む伯父と甥の間で交わされる会話である。話題の中心が土地の値段にあるときは話者がよく知っている女も *on* で表現される。そして、話題の中心がその女に移るとたちまち固有名詞や人称代名詞が登場するのである。15同様、述部情報に力点を置くために、主語情報は抑えられているのだと解釈できよう。

17 Les premières maisons avaient été construites il y a à peine sept ans. Le lotissement est situé sur un ancien marécage dont le remblayage avait été confié à une entreprise privée. *On* s'est aperçu trop tard que celle-ci y avait déversé tout ce qui lui tombait sous la main, y compris des produits dont les industries de la région se débarrassent comme elles peuvent.

(*L'Humanité*, 31. 05. 1980)

報道文の *on* の例である。いわゆる「不特定の人々」を表す *on* であるが、不定性の問題を抜きにして、情報の流れの面のみから見れば話は簡単になる。話者（記者）が伝えたいのは専ら述部が持つ情報であり、主語については関心の外にあるのである。*on* を *nous* なり *les habitants* 等の表現に置き換えると、報道の内容が変化してしまう。

18 ... *Nous* nous sommes aperçus trop tard que celle-ci y avait déversé tout ce qui lui tombait sous la main, ...

19 ... *Les habitants* se sont aperçus trop tard que celle-ci y avait déversé tout ce qui lui tombait sous la main, ...

重大な事実の遅過ぎた認知を伝えるのが主眼であった報道内容が、「誰が」気付くの遅過ぎたのかをも多少なりと問題にする内容に変わってしまう。こ



の例においても、on の使用で主語情報を切り詰め、述部情報を効率よく伝達しているのだという解釈ができればよい。

20 — Faudrait pas qu'y crève !

— Et pourquoi? Ça arrive qu'on se tue en tombant d'un arbre.

(PAGNOL, p. 19)

話者は「人一般」を言うのに単なる「人」としか情報を提示しない。主語について明示的な表現を使用する必要を感じていないのである。やはり、話者の発話の力点は述部にある。

21 — Et pourquoi? Ça arrive qu'un homme se tue en tombant d'un arbre.

on を un homme に書き換えると、発話における伝達の力点に変化してしまう。

on を主語とした文は情報の量に関して極めていびつである。主語については単なる「人」としてしか情報が提示されない。主語はあってなきに等しく、情報が極端に述部に傾いている。このような情報構造を持つ文は談話が述部の情報を指向している場合には格好のものであるはずである。ここで一つの仮説を提出する。

on の使用は談話内で述部情報の効率的な伝達に貢献する。

#### 4 ON を使用する話者の態度

on の機能はかなり明らかになった。on は主語を単なる「人」としてしか提示しない言語記号で、これを主語とする文は述部情報を効率的に伝達するのである。

ここで on を使用する話者の態度として次のような基本的なことを述べることができる。

on を使用する話者の態度は、主語に関する情報を低め、述部の情報を伝達の中心に据えようとする態度である。

しかし、これはあくまでも基本であり、on が使用される場で常に一定ではなく変異を生じる。この変異は大きく分類するならば概ね次のような3種類になると思われる。

#### a ON の積極的な使用

これは on を積極的に使用して、述部情報を効率的に伝達しようとする話者の態度、上に述べた基本そのものの態度である。

この態度は日常の会話にしばしば現れる。会話では状況が発話の理解を補足する豊富な情報をもたらすので、on を使用するには格好の場と言える。述部の情報が重要で、主語が文脈から自明であれば、主語として on が用いられる。

22 Eh! *On* ferme! Tu es sourd ou quoi? Robert, *on* ferme! (*Querelle*)

発話者はバーの主人である。誰がバーを閉店するかは自明である。主人が伝達したいのは専ら述部の情報「閉店する」である。

23 La serveuse: Vous êtes combien?

23 Le consommateur: *On* est trois.

ウェイトレスと客の間で交わされる会話である。答える客にとって主語は自明であり、伝えたい情報は「三人である」という述部の情報である。

以上二例について、主語の自明さと述部情報の価値の高さを強調したが、これらの on の用法は口語的な軽い表現として片付けられてしまうことが多い<sup>19)</sup>。しかし、口語表現になぜ on が多用されるのか、そのような使用を許す on の性格とは何なのかについて、その見解は単に「動詞語尾の節約」、「省力化」程度の根拠しか提示できない。「省力化」に役立つとしても、そこになぜ on が使用されるのかを明らかにする必要がある。on は述部情報に力点を置い



た伝達に適し、その上動詞語尾の節約に役立つから口語において多用されるのであって、その逆では決してない。GOSCINNY の書く 次の小学生の文章を見ればこのことがよく分かる。

24 ... Les batailles avec les grands, ça se passe toujours comme ça, eux, ils nous donnent des gifles et *nous on* leur donne des coups de pied dans les jambes. Là, *on* se donnait à plein et tout le monde se battait et ça faisait un drôle de bruit. (GOSCINNY, p. 148)

上級生と下級生の喧嘩を描写した文章である。書き手の下級生の側を問題にするときは、動詞語尾の節約をしたくとも主語情報の切り捨てができないために筆者は *nous on* なる表現を用い、上級生、下級生の区別が問題ではなくなって述部の情報だけが関心の中心となると主語は単なる *on* となる。「省力化」が *on* の使用の大きな動機となることは否定しないが、その背後にある *on* の談話上の機能を見無視することはできない。この機能があって初めて *on* は省力化の有効な手段となるのではないか。

#### b ON の消極的な使用

a では文脈より主語が自明であり、話者の力点が専ら述部情報の伝達に置かれていて、そのための *on* の積極的な使用であった。ここで扱う話者の態度はこれから若干変異する。力点はやはり述部の情報に置かれるのだが、主語に関して消極的な態度が入る。主語は文脈より必ずしも自明ではないのだが、話者は主語は明示するに値しないと考えるのである。ここの *on* の使用は文脈を利用した積極的なものではなく、主語そのもの（つまり旧情報）の価値を低く見るところからくる消極的な使用である。25はこの典型的な例である。

25 — Je voudrais aller au théâtre, en matinée. *On* donne L'Avare à la Comédie-Française.

話者の主眼は「コメディ・フランセーズにおける『守銭奴』の上演」を伝えることにあり、「上演者の *identité*」については話者の関心の外にある。

26 Théoriquement, sa revendication est injustifiée parce que la conception même de la Communauté exclut que l'on ramasse nécessairement sa mise et parce que les avantages retirés du Marché commun ne peuvent pas tous être comptabilisés. (Le Figaro, 10. 02. 1983)

27 Alors que l'on estimait, dans les milieux politiques ouest-allemands, que les négociations de Genève paraissaient complètement bloquées “au moins jusqu'à l'automne”, le secrétaire général de l'OTAN commençait déjà à prendre les devants. (Libération, 19. 01. 1983)

これらの報道記事で「誰が投資を回収するのか」、「西ドイツ政界の誰がジュネーブ交渉が行き詰まると認めるのか」などは話者（記者）の関心の遠くにしないことである。もしそれを明示するとなると、記事の内容は大幅に変わってしまう（3章の例文17参照）。

伝統文法で「人一般」を表すとされる on の用法もまたこの「on の消極的な使用」に該当すると考えることができる。

28 On ne récolte que ce qu'on a semé.

29 Quand on parle du loup, on en voit la queue.

30 On n'est jamais trahi que par ses siens.

話者は「人一般」を明示する表現を採ろうとしない。「人一般」を言うのが主眼ではなく、述部が伝達する内容を重視しているのである。これは主語に対する関心のなさからくる消極的な態度であると言える。このことは次の例を見ると一層よく分かる。

31 — Oui, mais pas brutalement comme ça. Quand on dit les choses, c'est moins impressionnant que quand on les voit. (L'ami de mon amie)

話者の第2の発話内容は一般に認められるような格言的内容ではなく、談話の状況に応じて作られた単なる話者の一見解に過ぎない。この一見解が格言めいて聞こえるのは情報量の極めて少ない on が主語として使用されたためである。話者が「人一般」を表そうとしたためではなく、消極的な on の使用が発話内容を格言めかせているのである。

## c ON の作為的な使用

a, b の場合とは異なり, ここで問題となる主語の談話上の価値は決して低くない。話者は談話内で価値の高い主語を意図的あるいは作為的に on とすり替えるのであり, このすり替えが話者の望むところとなる。重要であるものを重要でないかのごとく提示し, 聴者の関心を逸らしたり, 逆に聴者の関心を引いたりするわけである。

32 Comme le repas était fini, nous nous levâmes ensuite et l'on n'en parla plus.

(SANDFELD, p. 336)

33 — Eh bien, c'est ça, mène-les donc là ... Ça les amusera beaucoup.

— Où? On n'a rien décidé!

(SANDFELD, p. 336)

34 — Pourquoi? demanda Anne Desbaresdes.

— On ne sait pas.

(DURAS, p. 14)

上記三例には, 「もう話はしなかったというが, 話者当人はどうなのか」, 「話者は聴者をも何も決めなかった人の内に含めているのか」, 「話者当人も知らないのか」といった曖昧さがある。この曖昧さは話者が明示すべき主語を明示せずに済ませているところから生じるものである。

35 On n'a pas peur de vous, sachez-le bien.

(ASAKURA, p. 247)

36 — ... Pourquoi tu n'as pas peur de moi?

— Parce que t'es une brave fille, Mouchette!

— Sans doute. Avec Mouchette on prend le plaisir et pas le reste.

(Sous le soleil de Satan)

35では je が on と, 36では tu が on とすり替えられている。ここでは明らかに聴者をさげすむ話者の傲慢な態度が感じられるであろう。

これら a, b, c の使用態度が発話の状況や談話に作用して on に様々な価値を帯びさせることになるのではないだろうか。そのメカニズムについては 1 章で挙げた論考 CLAS, NISHIMURA に求めることができるであろう。

### おわりに

on は「人一般」を表す実詞、不定代名詞、人称代名詞と自らの姿を次々に変えるような言語記号では決してない。on は主語を単に「人」として提示するだけのものに過ぎず、意味を担う語彙としての価値は極めて低くて、主語として働く機能語とさえ極言できる言語記号である。このような言語記号を話者は次のように使用する。実詞や不定代名詞や人称代名詞に相当する旧情報を一様に on で代用して主語情報をできるかぎり低め、述部情報の効率的な伝達をはかる。そして、この使用態度は、大きく分類して、積極的・消極的・作為的の三種類に変異するのである。

今までの on の研究で、述部情報の効率的伝達に言及したものは、筆者の知るかぎり、皆無であった<sup>(4)</sup>。この小論では、on そのものが持つ機能としては最小限のものしか認めず、on を主語とする文の働きの方に分析の重点を置いた。このアプローチから得られた成果は、on の使用を主語・述語の情報の伝達の観点から明快に説明できる点で、ある程度の有効性があるのではないかと考える。

#### 注

- (1) 旧情報とは先行文脈で既に述べられた情報のみならず文脈や発話の場面・状況よりすぐに聴者の意識に上りうる情報をも指す。
- (2) 出典を明記していない例文は辞書や文法書に見られるありふれた例文もしくは筆者自身が作成した例文である。後者についてはフランス語話者のチェックを受けた。
- (3) 文脈、発話の場面・状況を以後誤解のない範囲で単に「文脈」と呼ぶ。
- (4) 人称代名詞に関するこの記述および後出の指示代名詞に関する記述は ils, ce, ça 等の代名詞には正確には当てはまらない。これらの代名詞の指示機能に触れること、これらと on の機能比較を行うことはこの小論の範囲を越える大きな問題であり、これらについては将来の課題としたい。
- (5) NISHIMURA, J. (1984), pp. 184-193.
- (6) Allons-y! への書き換えについては、フランス語話者より、「切迫した表現であり、

この文脈では適切な発話ではない」という意見を得た。

- (7) 伝統文法家の多くがこの種の on を familier, 'populaire, vulgaire とみなしてきた。これは GRAFSTRÖM, A. (1969) に詳しい。
- (8) NISHIMURA, J. (1984, 1987) に「on の使用は聴き手の注意を言述の別の部分に向ける」という言及があるが、詳しい分析・考察はなされていない。

### 参考文献

- 朝倉季雄 (1955) : 『フランス文法事典』, 白水社。
- ATLANI, F. (1984) : “On L’illusionniste”, *La langue au ras du texte*, Presses Universitaires de Lille, pp. 13-29.
- BENVENISTE, É. (1966) : *Problèmes de linguistique générale I*, Paris, Gallimard.
- CLAS, A. (1968) : *Le champ notionnel du pronom indéfini «on»*. *Essai de stylistique comparée français-anglais-allemand*, Tübingen.
- 土井隆広 (1989) : *La fonction de «on»*, 修士論文, 関西学院大学大学院 文学研究科。
- DUBOIS, J. (1965) : *Grammaire structurale du français : nom et pronom*, Paris, Larousse.
- FREI, H. (1971) : *La grammaire des fautes*, Genève, Slatkine Reprints.
- GRAFSTRÖM, A. (1969) : “«On» remplaçant «nous» en français”, *Revue de linguistique romane* 131, pp. 270-298.
- KRESS, G. (ed.) (1976) : *Halliday : System and function in language*, London, Oxford University Press.
- MOIGNET, G. (1965) : *Le pronom personnel français. Essai de psycho-systématique historique*, Paris, Klincksieck.
- (1974) : *Étude de psycho-systématique française*, Paris, Klincksieck.
- NISHIMURA, J. (1984) : *Langue et langage : Manifestation de l'observateur dans la description spatiale*, Thèse pour doctorat de 3<sup>e</sup> cycle présentée à l'Université Paris-Sorbonne.
- (1987) : 「代名詞 “ON” の使用について」, 『立命館文学』, 501号, pp. 1-21.
- PINCHON, J. (1986) : *Morphosyntaxe du français*, Paris, Hachette.
- SANDELFELD, K. (1965) : *Syntaxe du français contemporain t. I*, Paris, Champion.

## 例文資料

*L'ami de mon amie* : 「対訳シナリオ」, 『ふらんす』, 1988年8月号, 白水社, pp. 85-90.

DURAS : DURAS, M. (1958) : *Moderate Cantabile*, Paris, Édition de Minuit.

GOSCINNY : GOSCINNY, R. et SEMPÉ, J.-J. (1964) : *Le petit Nicolas*, Paris, Denoël.

NHK : “Un jeune mousquetaire”, 『NHKラジオ フランス語講座』, 1981年9月号-1982年3月号, 日本放送協会。

*Les nouveaux tricheurs* : 「対訳シナリオ」, 『ふらんす』, 1988年9月号, 白水社, pp. 89-94.

PAGNOL : 窪川英水 (編訳) (1988) : 『仏和对訳 愛と宿命の泉』, 白水社。

*Querelle* : 「対訳シナリオ」, 『ふらんす』, 1988年4月号, 白水社, pp. 86-90.

*Sous le soleil de Satan* : 「対訳シナリオ」, 『ふらんす』, 1988年11月号, 白水社, pp. 89-94.

(大学院博士課程後期課程)